

地域方言の教材開発による教育効果

岩崎 真梨子[†]

Educational effect by development of teaching materials about dialects

Mariko IWASAKI[†]

ABSTRACT

Adopting activities for the preservation and inheritance of dialects by interested students, this paper studies the effectiveness of education acquired by students who participate in the development of educational material on dialects. Consequently, in addition to the improvement of the students' interest and knowledge of dialects, the efforts have the following threefold effect. First, it nurtures students' ability to independently manage events. Second, it encourages students to problematize things/ideas. Finally, it promotes active communication with people the students are not normally in contact with. Although not always resulting in resettlement, students—particularly those who attended university outside the home town—stated that their future paths were affected by their attachment to their community.

The social response of the local communities and graduates anticipates regional revitalization being tied to the expected development of educational material on dialects.

Key Words: *dialect education, educational effect, dialect inheritance, community contributions*

キーワード: 方言教育, 方言の保存と継承, 教材開発, 学生の学びと成長, 地域貢献

1. はじめに

テレビやインターネットなどの普及により、共通語や標準語が浸透している現代だが、地域の方言に興味・関心を示す大学生は少なくない。教養科目のゼミナールである主題別ゼミナール I の講義で、方言を学ぶクラスを選んだ学生に

選んだ理由を尋ねると、「地元の言葉をもっと知りたいから」「今、地元を離れているが、地元の言葉が好きで、学びたいから」といった答えが返ってきた。

本稿では、そうした方言に興味・関心を持つ学生のうち、有志で南部方言を研究している「八戸工業大学 方言研究会」の学生の方言教材アプリケーションの開発と普及について取り上げる。方言教材の開発・普及に携わることで、学生がどのように成長するか、またこの研究活動を通して地域への愛着が育つのかという2つの観点に基づいて分析し、取り組みの教育効果について検討する。

先に結論を簡潔にまとめると、学生の成長に関して、「方言に関する興味・関心や知識が

令和1年10月30日受付

令和2年1月14日受理

[†] 基礎教育研究センター・講師

向上する」ほか、「学生主体で主体的にイベントを運営する能力」や「苦手なこと・新しいことへの挑戦」、そして「自分が普段接することの少ない人(異なる世代、方言、言語の人)と積極的にコミュニケーションを取る意欲」を得られることが明らかになった。

地域への愛着に関しては、必ずしも定住するという結果では出ないが、特に青森県南部以外の出身で南部方言について学んだ学生たちは、今後の進路に影響する経験になったと述べた。

2. 先行研究

方言教材の開発は、様々な地域で行われている。そのなかで、学生が主体となって教材の開発に取り組んでおり、教材を開発することによる教育効果まで示している例として、兼本(2014)⁹⁾を取り上げる。

兼本(2014)では、方言教材「ぐんま方言かるた」の開発の様子、学生自身の振り返りによる成長について述べられている。まず、3つのゼミナール合同で「ぐんま方言かるた」が制作される過程が詳細に示されており、次に、学生の成長について「社会人基礎力」の観点に基づき分かりやすく数値化している。

本研究の取り組みは、ゼミナールとして行っているものではなく、兼本(2014)のプロジェクトに比べて小規模であると言わざるを得ない。しかし、参照すべき点は多々ある。その一部を以下に引用する([]内と波線は筆者による)。

プロジェクト開始当初は、ゼミの活動の一環だから参加しているという佐藤ゼミ、「商品」ではなく「作品」を作るという本多ゼミ、「売れる商品」を作るという繭美蚕と、それぞれがばらばらな方向を向いていた。よって、全体会議をやっても何かざこちない感じが拭えず、お互いに自分たちのやることしか考えられずにいた。[脚注省略]しかしながら、プロジェクトが進むにつ

れて、それぞれの立場や考え方がだんだんとわかってくると、役割の分担を見直したり、新たに出てきた課題を皆で解決したりと、少しずつではあるがうまく調整しながら制作を進めていけるようになっていった。

引用からも分かる通り、このプロジェクトは3つのゼミナール合同で行われており、徐々に「チームで働く力(チームワーク)」が涵養されていった。結果、社会人基礎力育成グランプリ2013 関東地区予選大会でも、他のチームに比べてチームワーク力を高く評価されたとある。

方言アプリケーションを開発した「八戸工業大学 方言研究会」も、複数の専攻と学年の学生で結成されている。それぞれに専門に基づいた得意分野・苦手分野があるが、イベントなどを運営していくにつれて、役割分担ができるようになった(後述)。学生が成長するポイントは兼本(2014)で指摘されるものと類似しており、今後は社会人基礎力の育成という観点でも研究を見直すことができるという示唆を得た。

先行研究を踏まえ、3節では「八戸工業大学方言研究会」(以下、方言研究会と略す)の取り組みについて紹介し、4節以降で教育効果について述べる。

3. 学生による方言教材の開発と、開発から学ぶこと

3.1 方言教材の開発過程

方言研究会は、方言に興味・関心を持つ八戸工業大学工学部の学生7名で結成している。工学を専攻する大学生が取り組める方言の保存・継承活動について話し合い、共通語(標準語)を話すと南部方言に変換するアプリケーションを作製した。

アプリケーションの作製は、システム情報工学科の学生が中心となっており、イベントの運営や活動の記録は土木建築工学科や生命環境工学科を合わせて3学科の学生全員で行った。以下、

アプリケーション作製の手順を記す。

まず、学生が『五戸方言語彙』²⁾『南部のことば』³⁾『島守弁ミニ事典』⁴⁾のなかから、アプリケーションに登録すると良いと考える南部方言を選抜した。選抜基準は、主に「身近だが方言では言わない言葉」「方言でしか言えない言葉」である。また、単語だけでなく例文もあったほうが方言の学びになると考えたが、普段使わない方言で例文を考えることは困難であったため、デーリー東北新聞社ホームページの南部方言講座の例文を参考にした（現在はページが削除されている）。次に、南部方言の語句と例文を、南部方言の講師を務める柗谷伸夫氏に依頼し、録音データを作成した。最後に、プログラミングを行い、共通語（標準語）を話すと南部方言の録音音声の流れ、文字と音声波形が表示されるアプリケーションが完成した。

最初にアプリケーションに登録したのは、以下の75語である（括弧内は共通語）。

あぎた(あご)、あぐど(かかと)、あずかる([犬などを]飼う)、あずましい(気分がいい)、あめる(くさる)、ありぐ(歩く)、あんべ(行こう)、あんべわりい(具合が悪い)、いーごった(良さそうだ)、いだしねえ(もったいない)、いなぐする(失くす)、うるがす(水にひたしてやわらかくする)、えへる(すねる)、おしづがっこに(気をつけて)、おじる(下車する)、おっかねえ(こわい)、おどろぐ(目が覚める)、おへる(教える)、おんであれ(きてください)、かだごど(頑固者)、かだる(加わる)、かます(かき混ぜる)、からやぎ(なまけもの)、きみ(とうもろこし)、きもやぐ(腹を立てる)、ぎゃアぐり(まわり)、くーする(なやむ)、くびた(首)、くまる(からまる)、け(食べて)、けえな(うで)、けね(か弱い)、けんどばた(道路の脇)、ごあいきる(自慢する)、ここまる(かがむ)、こさえる(つくる)、ごっつおう(ごちそう)、ごっつりする(よろこぶ)、こなす(いじめる)、このげ(まゆげ)、こびり(おやつ)、ごんぼほる(だだをこねる)、さずる(なめる)、しょし(はずかしい)、

そんだなす(そうだね)、たなぐ(持ち上げる)、たましぼろぎ(とてもおどろく)、たまな(キャベツ)、てえご(同い年)、とりける(かたづける)、ながまる(足をくずして楽にする)、なげつつ(泣き虫)、なげる(捨てる)、なづぎ(おでこ)、ねまる(すわる)、はへる(走る)、はらあつえ(満腹)、ひゃっこい(冷たい)、ぺえこ(ほんの少し)、へぎまる(あわてふためく)、へっちょはぐ(苦勞する)、へなが(せなか)、ほぺたっこ(ほほ)、ほろる(払い落とす)、まなぐ(目)、まるっこ(全くできない)、まんま(ご飯)、みりめがす(一生懸命)、めぐせ(みっともない)、めんこい(かわいい)、もちよこい(くすぐったい)、もよる(着かざる)、ゆきばる(ひもでしぼる)、わがね(だめだ)、わらすんど(こどもたち)

この後、登録の少なかった副詞などを17語増やし、さらに地域に向けて開講した公開講座(2019年6月実施)で一般の方が登録する南部方言を選び、64語を追加した。現在、合計156語の南部方言をアプリケーションで学ぶことができる。

このアプリケーションを用いて、学園祭などのイベントで青森県南部地域の方言を学ぶ体験会を行った。

3.2 方言教材による学生の学び

方言教材を開発することで、ほかならぬ学生たち自身が、最も方言について深く学んだ。

体験会を実施するなかで、学生は「お気に入りの南部方言」を見つけるようになった。そのひとつが、「たまな(共通語：キャベツ)」である。自分たちの世代では使わない方言だが、中高のアクセントや「共通語とはかけ離れた単語になるところ」が良いと感じるらしく、イベントや新聞社・テレビ局での取材で「(学生たちで)アプリケーションを使ってみてください」と依頼されると、高確率で「たまな」を披露していた。

他に、パ行音が途中で入る「ゆきばる(紐で縛る)」や「くびた(首)」は、「パ行の音が可愛らしい」「日本語にはあまりない音(パ行音)を使っている」という理由で、女子学生や体験に来た

女子高生の評価が高かった。

他に、共通語形が長い「水に浸して柔らかくする(方言：うるかす)」や「足を崩して楽にする(方言：ながまる)」は、「方言にすると短くて楽に表せるから面白い、試してほしい」という理由で体験者に勧めていた。まとめると次のようになる。

表1 学生が注目する方言とその理由

注目する方言	注目する理由
① たまな	共通語形と大きく異なる
② くびた ゆきばる	日本語にはあまり含まれないパ 行音が入っていて、可愛い
③ うるかす ながまる	共通語形が非常に長く、方言で 話すと楽に表せる(「省エネな言葉」と表現)

①は、他に「とうもろこし」の方言形である「きみ」や「おやつ」を表す「こびり(こびりっこ)」が入る(「きみ」は津軽地域他でも使用される)。ただし、「きみ」は学生の世代でも使うっており、「たまな」よりも身近な方言のようである。

また、③の「うるかす」や「ながまる」に関しては、共通語形が長いためアプリケーションの音声認識の難易度も高いという技術面の課題があり、その分認識されて方言に変換されると体験者の喜びに繋がるため、「ぜひ試してほしい」と体験者に勧めていた。体験者も、「こんなに短くなるんですね」と驚いていた。

以上の通り、教材を開発することで、学生自身が南部方言の語彙を増やし、興味・関心を持たせたと考える。

3.3 体験者とのコミュニケーションによる学び

アプリケーションの体験会を開くうえで避けられないのが、体験会に参加した方々(体験者)とのコミュニケーションである。

方言研究会に所属している学生に、体験者とのコミュニケーションで苦労した点を尋ねると、以下のような回答を得た(回答内容は、学生から

論文掲載の許可を得たうえで、筆者が簡潔にまとめて記載する)。

- 子どもの声をアプリケーションが認識しないときのフォローが大変。
- 子どもが大きな声・音を立てたときにどう対応していいかわからない。
- 高齢層の体験者との会話時間が長いときの対応で疲労を感じる。
- 特に苦労したとか、不便を感じたことはなかった。

以下で詳しく見ていく。

(a) 子どもの声をアプリケーションが認識しないときのフォロー

これは技術面に関する課題である。2018年8月に参加した「青少年のための科学の祭典」(於 八戸市視聴覚センター 児童科学館)の体験会で、小学校低学年以下の、特に女子の声をアプリケーションが認識しにくいことが明らかになった。

この問題は、使用している音声認識自体が大人の声をサンプルとして使用しており、子どもの声に対応できていないために起きる現象であり、学生が容易に解決できるものではなかった。そこで、2日間ある祭典のうち、2日目はマウスで操作できる方言リストを作成し、音声認識がうまくいかない場合でも方言を選べるように工夫した。しかし、75語のリストから方言を選ぶのに時間がかかったため、基本的には対応する男子学生が共通語を話し、南部方言を聞かせるという方法をとった(子どもと同様、大学生でも男子学生の声のほうが認識し易く、男子学生が対応した)。

ただし、たとえこの方法をとったとしても、学生は「認識されずがっかりしている子どもを見ると、申し訳ない気持ちになるし、なかなか声が認識されないのに何度も挑戦してくれる子どもに、どう言葉をかけるか考えるのは大変だった」と述べていた。

(b) 子どもが大きな声・音を立てたときの対応

技術的な面ではなく、コミュニケーションに関する問題である。

小さな子どもがアプリケーションを使用する際に、大きな声や音を立てたとき、どうしたらいいかわからなくて困ったという意見があった。

(c) 高齢層の体験者との会話時間が長いときの対応

(b)と同様、コミュニケーションに関する問題である。

高齢層の体験者は、方言に対する思い入れがあり、長時間相槌を打つことになる場合もある。時には、大学生には聞き取れない方言が多く混ざり会話が困難になるときもあり、また、理解できたとしても長時間にわたる会話に疲労を感じるという意見があった。

(b)と(c)は、どちらも普段コミュニケーションを取ることの少ない世代と交流することによる戸惑いや、不慣れを表している。学生にとっては疲労や困難を感じることもようだが、こうした経験を積むことが、学生にとって学びになると考えられる。

(d)特に苦勞したとか、不便を感じたことはなかった

1名のみ、このように答えた。

2018年度7名、2019年度9名で活動している研究会だが、学生の回答からも様々に個性があるということを実感した。

3.4 学生間のコミュニケーションによる学び

さらに、方言研究会で方言教材を開発し、体験会を実施するにあたって、学生間のコミュニケーションにも着目した。

先述の通り、この研究会は異なる専門分野と学年の学生によって構成している。普段、接することの少ない地域の方とのコミュニケーション以外に、学生間のコミュニケーションからも学ぶことがある。

学生間のコミュニケーションに関して、特に通

目すべきだと考えたのは次の2点である。

1 点目 それぞれの学生が、自分の得意なこと・苦手なことを把握し、役割を分担して活動に取り組んだ。

話し合いやイベントの実施を重ねるなかで、役割分担が早期に出来上がり、チームとしての教材開発作業や、イベントの作業は比較的円滑に行われた。

アプリケーションの開発や、パソコンの操作などは、システム情報工学科の学生が最も得意とし、リードする形になった。

一方、体験会を運営する場合は、受付の設置や記帳の依頼など、アプリケーションの開発や体験以外の作業や仕事も生じる。こちらは、土木建築工学科や生命環境科学科の学生が中心となって取り組んだ。

さらに、活動内容を研究会で発表する、ポスター発表をする、論文・報告書にまとめるといった、学術的な活動にも挑戦した。意欲と能力のある学生が立候補し、口頭発表や論文・報告書の執筆を担当した(後述)。

こうした作業や仕事の役割分担について、2018年度は学年も学科も問わず、教員(筆者)の動きを見て、あるいは指示を受けて、気づいた学生から動くという形であった。しかし、2019年度は、2018年度から所属していた学生が率先して動き、新しく入った2年生は3年・4年生に倣っていた。2018年度の活動経験者は、主体的に動く力を自然と身につけていた。

2 点目 苦手分野を補い合い、問題を解決した。

たとえば、体験会を実施する際、イベントによっては呼び込みを必要とすることがあった。その際、積極的に呼び込みができる学生と、なかなか声が掛けられない学生に分かれるが、自然と呼び込みが得意な学生と苦手な学生でペアが作られ、二人で協力して呼び込みをしていた。

ただし、次の点は課題となった。

課題 役割が明確化されるに伴って、一部の学生が「この作業は自分に向いていない」「自分の役割ではない」という理由で協力しなくなる。

特に、呼び込みやプレゼンテーションといった役割を、一部の学生が避け続けた場合、他の学生から不満が出る場合もあった。その際は、「協力しない人はしない」「苦手なことを無理矢理押し付けても良い結果は出ない」などと折り合いをつけて活動を続けていた。

複数人で活動した場合、軋轢はどうしても生じるものである。問題に向き合い、自分なりの解決策を見つけて活動を続けている点で、学びになっていると考える。

4. 学生の学びと成長のまとめ

繰り返しになる部分もあるが、筆者(教員)側から見た学生の学びと成長を簡潔にまとめる。

4.1 主体的な行動

方言研究会としての最初のイベントは、八戸市の中心街で行われるホコテン(歩行者天国)で、訪れた人に対し方言アンケート調査を行った。その際は、まだ活動が始まったばかりで、自分から動ける学生もいれば動けない学生もいた。

しかし、その後のイベントでは、教員が見ていないところでも準備が進むなど、徐々に自主的な行動が増えていった。3.3 節でも述べた通り、2018 年度の活動を経た 2019 年度では、指示を必要とすることなくイベントの運営ができるようになった。

4.2 苦手分野の克服

方言研究会のなかには、人と話すことが苦手な学生もいる。苦手なことを避け続ける学生ももちろんいるが、克服する学生もいる。

特に、2018 年度は、八戸工業大学が学生の取り組みを支援する事業である学生チャレンジプ

ロジェクトに応募して採用されていた。そのため、事業の進捗状況を報告するプレゼンテーションをする必要が生じた。このとき、人前で話すのが苦手な学生が、採用時の面接や中間報告のプレゼンテーションを担当した。最初は声も小さく、緊張が感じ取れたが、半年後(2019 年)のイベントでは堂々とした声量で会場に指示を出し、2018 年度の経験が生かされていた。

4.3 新規の挑戦

3 節でも述べた通り、方言アンケート調査やアプリケーションでの取り組みをポスター発表や研究会発表で公開し、さらに論文と報告書にまとめた。以下(1)~(4)は、いずれも、学生がスライドや論文・報告書の文章を構成している。

- (1) ポスター発表：ロールモデル講演会・研究交流会(2019年2月21日 於八戸工業高等専門学校)⁵⁾
- (2) 研究会発表：平成30年度第4回芸術科学会東北支部研究会(2019年3月30日 於八戸地域地場産業振興センター(ユートリー))⁶⁾
- (3) 報告書：八戸工業大学紀要 第38巻⁷⁾
- (4) 学術論文：八戸工業大学紀要 第38巻⁸⁾

(1)では A0 判のポスターを作成して学外で発表すること、(2)ではスライドに基づいて学外で口頭発表を行うこと、(3)(4)ではレポートや趣味以外の論文形式の文章を書くことに挑戦した。

5. 学生へのヒアリング調査 —方言研究の意義—

本節では、方言研究会の学生にヒアリング調査を行った結果を挙げ、方言研究をすることでどのような学びを経験したか、そこから考えられる方言研究の意義とは何かについて検討する。

ヒアリング調査は、9名のなかから任意に4名を選抜して行った。幼少期から八戸市に住んでいる学生(地元学生2名)と、他県が出身地で18歳か

ら八戸市に移り住んだ学生(地元外学生2名)に分かれている。

質問項目によっては、地元学生と地元外学生で大きく回答が異なるため、地元学生と地元外学生とで分けて掲載する。なお、ヒアリング調査は論文への掲載許可を得て実施した(重要だと思われる箇所に傍線、特に重要だと思われる箇所には波線を記す)。

問1. 方言研究会に入ったきっかけは。

- 高校生のときに、筆者が実施した方言アンケート調査に参加しており、その際に方言研究に興味を持ったから。
- 筆者・友人に誘われたから(3名)。

きっかけに関しては、研究会の9名中8名が「誘われたから」である。

ゼミナールなどとは異なり、また学生が自身の興味に基づいて立ち上げた研究会でもないため、きっかけに関しては消極的なもので問題ないと考えている。

問2. 方言教材アプリケーションを作製・使用することで、どのような学びがあったか。

【地元学生の回答】

- 家族と方言について話す機会が増えた。
例1. 「あめる」と「腐る」の違いについて考えた。
例2. アプリケーションに登録されている方言で、親は知っているが、自分は知らないものがあることが分かった(例：鍵かる。共通語では鍵をかける)。
- これは方言だったのか！という方言を発見した。
- 「おばあさん」を表す言い方が何種類もあることに驚いた(アプリケーションには、「ばばっちゃん、ばっちゃん、ばへ、ばさま」の4語を登録している)。
- 以前より多少分かる語彙が増えた。ただ、使うかと言われるとまた別だと思う。
- 地元の方言は、たとえ県外に行っても使う

と思うけれど、通じなければ直す。

地元学生は、自身の地域の方言について、新たに学ぶことがあり驚く傾向にある。特に、日常で共通語だと思って使用していた言葉が方言だった場合の驚きは新鮮であるようだ。自身の言葉を見直すきっかけになっていると考えられる。また、たとえ方言の保存・継承活動に取り組んだからといって、全ての学生が地元の方言に肯定的になるとは言えず、コミュニケーション上の妨げになるのであれば使いたくないという意見もあった(下線参照)。

【地元外学生の回答】

- 方言に対する知識は格段についた。アルバイト先で「いーごった(良さそうだ)」などと言われたとき、アプリケーションに登録しているので気づくようになった。
- 両親が津軽地域に移り住んだときに、津軽の方言に染まる努力をしたという話を思い出した。
- (青森県ならびに南部地域出身の)相手の言葉が分からないときがある。たとえば、若年層でも「あめる」などは使う。会話のなかでそういう方言が出てきたときに、意志疎通が厳しくなることもあった。そうした経験も踏まえて、方言の良い勉強になった。
- 方言の勉強も、外国語の勉強と同じで、コミュニケーションの勉強に繋がると思う。興味を持つか持たないかで、コミュニケーションの幅が広がる。
- 方言を勉強したくなければ、共通語や、地元(学生にとっては宮城県)の方言を話す人だけ話していればいい。けれど、方言研究を経験することで、方言を話す人たちともコミュニケーションがとれるようになる。

地元外学生は、2人とも「方言に対して興味・関心を持った」「それにより、コミュニケーションの幅が増えた」という点を挙げた。

- 問3. 作製したアプリケーションに対する意見・今後の発展性についてどう思うか。
- (アプリケーション開発者の学生)音声認識アプリケーションを作ったのは初めてで、挑戦することの大切さを学んだ。
 - 若年層にとっては、まずアプリケーションで遊んで、方言への興味を抱くきっかけを持たせることが大事だと考える。
 - 方言アプリケーションは、英語の聞き流しと同じで、聞いて自然と覚えるものだと感じた。
 - アプリケーションの機能として、自動的に方言を登録していく仕組みが欲しい。
 - イベントを実施するときには、人数が必要なので、もっと人数を増やしたほうがいい。

方言教材のアプリケーションについては、それぞれが今後の改善点や有効性を見出している。研究会員の確保が課題となるが、今後も継続して活動を取り組めると考えられる。

問4. 現状の今後の進路・地域への愛着についてどう思っているか。

【地元学生の回答】

- 地元就職することを希望する。
- 地元以外で就職することを希望する。
- 八戸市は不便なところではない。遊びに行くなら関東に行きたい。でも東京には住みたくない。
- 太平洋側に住みたい。
- 地元ではやりたい仕事が見つからない。

【地元外学生の回答】

- 仙台市で暮らしたい。いろいろなところに住んでみたい。
- いろいろなところに住んでみたいが、東北からは離れたくない。
- 青森県のいいところは、むしろ人口が少ないところだと考える。
- 海外で仕事がしたい。

- たとえ今後東北に住まなくても、八戸市に住まなくても、方言の研究活動を通してコミュニケーションの幅を増やすことを経験したということが重要で、この経験を踏まえて皆それぞれの進路に進んでいくと思う。

4名の学生に尋ねたところ、地元で働きたいと答えた学生は1名で、他は東北地方(仙台市で就職が決定)、関東、海外各1名と、それぞれ異なった。

この研究を始めた当初、「(地元か否かに限らず)ある地域の言葉(方言)に愛着を持つことは、その地域で定住することに繋がるのではないかと期待していた。言葉への愛着によって、IターンやUターンの促進を図ることが可能となり、地域が活性化するのではないかと考えたためである。

しかし、今回のヒアリング調査によると、方言を学ぶことは、

- 地元学生にとっては、自身の方言を見直し、家族や地元の人とのコミュニケーションについてより深く考える機会となる。
- 地元外の学生にとっては、自身の生育方言・生育言語とは違う言葉を話す人々と、積極的にコミュニケーションを取る意欲を涵養する。

という成果をもたらしたのではないかと考える。特に、地元外の学生は、波線で示したように、方言に興味を持つことで、コミュニケーションの幅が広がったという回答が得られた。

体験会参加者の反応も踏まえると、今後、IターンやUターンといった地域に若い人材、新たな人材を定着させるために方言教材を活用する場合は、「地元の中学・高校生に方言に興味を持つきっかけ」「青森県に少なからず興味を持つ(あるいは訪れたことがある)県外の方に、地元の人とコミュニケーションを取りたいと思うきっかけ」として提供することが有効ではないかと考える。この有効性の検討については、今後の課題としたい。

6. 地域・社会の反応

活動に取り組むなかで、地元新聞社やテレビ局で数多く取り上げられ、学生のモチベーションが向上した。

また、学生の出身高校の後輩や、八戸工業大学の卒業生から連絡を受けた。

特に、八戸工業大学の卒業生からは、今後の研究に協力したいと提案されることがある。以下に2件を紹介する(論文掲載にあたって、卒業生の同意を得て記載している)。

バイオ環境工学科(現・生命環境科学科)の卒業生

- 筆者や学生との繋がりはなく、大学にあててアプリケーション開発者の学生に連絡があった。
- はじめに、アプリケーションに関する質問があった(オンラインで公開しているかどうかなど5点)。
- 今後アプリケーションに加えると良い方言(例：手袋を履く)などの改善があった。
- 2019年に新たに加えた方言の例文の作成を担当した。

この卒業生は、上述の通り筆者や方言研究会の学生と直接の繋がりはないが、葉書でアプリケーションに興味を持ったという連絡があった。葉書には、現在は八戸市に住んでいないが、郷土に対する愛着があり、自分にできることがあれば協力したいとの旨が記されていた。何度かメールでやり取りをし、2019年に新たに加えた方言の例文作成を依頼した。

特に、2019年に新たに加えた方言の例文作成については、方言研究会が方言をあまり知らない学生で構成されているため、大変有意義であった。今後は、卒業生が作成した例文を基に、録音データを作成する予定である。

システム情報工学科の卒業生

- 筆者の講義を受けた卒業生のひとりである。
- アプリケーションをオンライン公開しては

どうかという提案があった。

- 今後、共同でオンライン化や、県外・国外で利用されるように発展させられないかという提案があった。

システム情報工学科の卒業生からの提案は、今後の研究活動で実現していきたい課題である。

以上の通り、教材開発の教育効果は、在学生だけでなく卒業生にも及び、地元のために何かできたらという提案を得るに至っている。

7. おわりに

本稿では、地域方言の教材を作るという取り組みについて取り上げ、その活動から学生が得る学び、教育効果を示した。

教員の側から見て、特に教育効果を感じる点は、苦手なことを研究会で補い合い、できなかったことができるようになるという成長である。特に、1年目から2年目にかけて、受身だった学生たちが主体的にイベントを運営した変化については、驚きとともに大きな成長を感じた。

学生自身が実感した教育効果は、「もし、方言を勉強していなかったら、周りで方言を話していても気づかなかった」「方言を勉強したから、方言を話す人たちと積極的にコミュニケーションをとろうと思った」といった発言に集約されるのではないかと考える。

地域や卒業生といった社会の反応を受けて、方言教材の発展が見込まれることから、今後ますます地域への貢献ならびに活性化に繋がることを期待する。

謝 辞

本研究は、公益財団法人青森学術文化振興財団ならびに一般財団法人青森県工業技術教育振興会の助成を受けている。

参考文献

- 1) 兼本 雅章：異分野の学生たちによる『ぐんま方言かるた』制作プロジェクトとその教育効果—仮想企業「繭美蚕」の活動を中心に—, 経済教育 33, 経済教育学会, pp.166-175, 2014.
- 2) 能田 多代子：五戸方言語彙, 個人出版, 1963.
- 3) 佐藤政五郎：南部のことは, 伊吉書院, 1982.
- 4) 「島守弁ミニ事典」編集委員会：島守弁ミニ事典, 島守地区自治会連合会, 1999.
- 5) 附柳希純：若者の南部方言—気づかない方言の方言理解と使用—, 2018 年度 ロールモデル講演会・研究交流会, 於八戸工業高等専門学校, 2018.
- 6) 岩崎真梨子, 附柳希純, 高島直人, 佐藤和範, 大崎有羽：アンケートやアプリケーションを用いた青森県南部地域の方言継承活動, 芸術科学会 東北支部大会, 於ユートリー, 2019.
- 7) 高島直人, 岩崎真梨子：他県からみた南部方言—兵庫県・岡山県での方言アンケート調査を踏まえて—, 八戸工業大学紀要 38, 八戸工業大学, pp.34-48, 2019.
- 8) 尾崎梨玖, 佐藤和範, 岩崎真梨子：方言コミュニケーションプロジェクト活動報告, 八戸工業大学紀要 38, 八戸工業大学, pp.129-135, 1982.

要 旨

本稿では、方言に興味・関心を持つ学生たちの方言保存・継承活動について取り上げ、学生が方言教材の開発に携わることで得られる教育効果について検討する。

結論として、この取り組みを通して、学生の方言に関する興味・関心や知識が向上するほかに、①学生主体でイベントを運営する能力の涵養、②苦手なこと・新しいことへの挑戦、③普段接することの少ない人々と、積極的にコミュニケーションを取る、という 3 つの効果が得られた。地域への愛着に関しては、必ずしも定住するという結果では出ないが、特に地元外から進学した学生たちは、今後の進路に影響する経験になったと述べた。地域や卒業生といった社会の反応を受けて、方言教材の発展が見込まれ、地域貢献や活性化に繋がることを期待する。

キーワード：方言教育, 教育効果, 方言継承, 地域貢献